

らず、かまへ太刀なり、此氣のするどなる事、太刀を構へて切る如くなるゆゑにいふと、是は僻説なりとぞ思はる。只深き理屈もなく、むかしより言ひならはしたる名にてあるべし、廣大和本草などには、此漢名を考へ出せり、さる事にや、

〔和漢三才圖會三象〕颶○中

蝦夷松前臘月嚴寒而晴天有凶風行人逢之者卒然倒仆其頭面或手足五六寸許被創俗謂之鎌閉太知然無至死者急用萊菔汁カボチャ傳之即愈痕如金瘡也津輕地亦間有之蓋極寒陰毒也、

〔閑田次筆〕一種の風有て俗にかまいたちといふは、かくのごとく甚しからねど、此筋にあたるものは刃をもて裂たるごとく疵つくはやく治せざれば死にも及ぶとなん、これは上方にてはなきことなりと思ひしに、今子のとし予〇伴が相識人の下婢はつかの庭の間にてゆえなくうち倒れたり、さてさまぐに抱へたすけて、正氣に復して後見れば、頬のわたり刀もて切たるごとく疵付しとなん、即これなるべし、又是につきてある人の話に、下總國大鹿村の弘教寺の小僧この風にあたりて惱みしに、古曆を霜クワヤキにして付しかば、忽ち治したると也、曆を霜にして付るといふことは、予もかねて聞及びしが、これは現證なり、下總甲斐の邊にては、窻明り障子なども曆にて張るか、れば彼風いらすといへり、さて其わたりにては、風神太刀を持といふより、かまへだちと稱ふとかや、かまいたちと稱るは、此語をあやまれるにや、是は語に理あり、

〔兔園小説四集〕奇疾

享保十四年八月の頃、本所石原徳山五郎兵衛中間八郎、俄に尻に犬の尾を生じ、五日の朝飯食し兼ねしことありき、摺鉢に食を入れ與ふれば、快く食す、夫より人相も大に變じ、全く犬の如し、夜中犬の聲を聞くときは、必飛び出だす、日ごろ犬を殺し、祟と、皆人傳へ云ひき、

〔曲亭雜記一下〕奇病の評